

進路意思決定力と自己効力感

自己効力感研究から進路意思決定を再考する

浦上 昌則
(南山大学文学部)

1. 自己効力感(self-efficacy; Bandura,1977他)とは

ある行動が自分にうまくできるかどうかという予期(効力予期)の、本人によって認知されたものである。そしてこれは、行動や行動の変容に影響を及ぼす主要な変数として位置づけられている。またこれは、その行動を開始するか否か、どれくらい努力を継続するか、困難に直面した際に、どれくらい耐えうるかを決定するとされている。とすると... 進路選択・決定についての行動に対する自己効力感を測定することができれば、人の進路選択・決定行動を予測することができる。またその自己効力感を高めてやることできれば、進路選択を前に戸惑ってしまい何もできないようなことを防げるのでは？

そこで、進路を選択・決定する過程に必要な行動に対する遂行可能感を指す概念が登場する(進路選択に対する自己効力感/進路選択自己効力感/進路決定自己効力感など)。

2. これまでの研究成果

進路選択に対する自己効力感が高い者は、意識レベルでも行動レベルでも、望ましい結果を示す。しかし、行動レベルの場合(特に行動回数などを指標にした場合)、明確な関連性が統計的に認められない場合も多い(例えば、浦上(1994)、富安(1997)、富永(2000)など)。

3. 自己効力感研究の限界

私がなぜ自己効力感に着目したかを考え直すと、「何が良い進路選択・決定なのかは一概に言えない。だけど、一生懸命考えたり、人よりも多くの活動をする事は、現在の社会情勢にあるかぎりには必要である」というある種の開き直りからであった。つまり、理論通りの結果が出たからといって、進路選択に対する自己効力感が高いことと良い進路意思決定の関連を明確に主張できない

のである。これは私自身の研究の限界でもあるし、他の研究の限界でもあろう。そして行き着いたところは、良い進路意思決定とは何を指すのかという根本的な問いであった。

4. 良い進路意思決定とは

進路意思決定とは、進路決定と同義の包括的な概念と考えている。そこには、要素として「決定方法」と「決定動機」が含まれるだろう。私自身としては、意思決定理論で扱っている合理的な意思決定などは前者に該当し、自己効力感からのアプローチは後者に位置づけられると考えている。

すなわち良い進路意思決定とは、「決定方法」と「決定動機」さえ整っていれば、その時点ごとで実現可能なもの、評価可能なものである。そのためその個人の資源を使い切ったものであれば、中学生でも良い進路意思決定は可能であるし、大学生でも可能である。しかし、中学生の決定よりは大学生の決定の方が良いのではないかと指摘される方もおられるだろう。そこにある差は、個人の資源の差である。経験はもちろん、知的な発達程度、知識・情報量、人間的な強さ、社会化の程度などである。しかし、これは良い進路意思決定とは切り離して考えるのが妥当ではないだろうか。

5. 支援の方向

先のように考えれば、良い進路意思決定に向けての支援では、個人の資源の涵養を目標から外してしまうことができる。意思決定の手順を手ほどきし、また決定への動機を高めるように働き掛けるだけと割り切ってしまうのである。従来からの指導は、内容的に個人の資源の解明に傾斜しすぎていたようにも感じる。そのため良い進路意思決定に向けての支援は、内容的に全体的バランスを回復することにつながると考えられる。